

《2012年7月例会報告》

【日 時】2012年7月17日（火）19:00～21:00（その後「ルン」～1:50頃）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】EURO2012 を振り返って

【演 者】徳田仁（(株)セリエ）、田村修一（フットボールアナリスト）、宇都宮徹壱（写真家・ノンフィクションライター）

【参加者（会員）13名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、井上俊也（大妻女子大学）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、宇都宮徹壱（写真家・ノンフィクションライター）、籠池哲哉（サッカーファン）、佐藤真成（「蹴球亭」）、白髭隆幸（日本スポーツプレス協会）、鈴木崇正（NEC デザイン&プロモーション）、田中理恵（サッカーファン）、田村修一（フットボールアナリスト）、徳田仁（(株)セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、森政憲（早稲田中学高等学校非常勤講師）

【参加者（未会員）1名】★木村康子（フリーライター・エディター）

【ルンからの参加者】金子正彦、北原由、庄司悟

【報告書作成者】岸卓巨

注1) ★は初参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

EURO2012 を振り返って

徳田仁（(株)セリエ）、
田村修一（フットボールアナリスト）、
宇都宮徹壱（写真家・ノンフィクションライター）

<目次>

参加者自己紹介

プレゼンⅠ. EURO 観戦ツアー企画者の立場から

ー現地で見たこと、感じたこと 徳田仁

プレゼンⅡ: ジャーナリストの立場から①

ー今大会を振り返って 田村修一

ディスカッションⅠ: 今大会について

プレゼンⅢ. ジャーナリストの立場から②

ー10年前との比較 宇都宮徹壱

ディスカッションⅡ: これからの EURO

<参加者自己紹介>

中塚 日本にずっといたおかげで時差ぼけでした。

田村 ワールドカップ予選を2試合見てからウクライナに行き、フランスの初戦から最後まで現地で取材しました。その後も1週間キエフに残り、さらにフランスに1週間いました。

森 学校の非常勤講師をやっている EURO は日本で見ていました。

白髭 EURO は 1888 年と 1892 年の 2 回現地で取材しました。今回ワルシャワのスタジアムで開幕戦をやっていましたが、1996 年のドイツ大会でスタジアムをみた時にはボロボロだったのが、今回すごく綺麗になっているのに驚きました。

木村 ライターをしています。EURO の期間中は本当は現地に行くつもりだったのですが、大変忙しい時期に重なってしまい徹夜仕事の傍らにテレビをつけていた状態でした。

鈴木 EURO は 1996 年、2000 年、2004 年と現地で見ましたが、最近は無沙汰しております。共同開催が定着してきていますが、今回は単独開催に戻るということで、運営面についても気になります。

牛木 ワールドカップには絶対行きたいのですが、EURO は他の用事と度々重なってあまり縁がなく現地に行ったのは1度だけです。

阿部 1972 年大会が1番印象に残っています。思い出の緑のユニフォームを着て戦うドイツが見られず残念でした。

佐藤 WOWOW で全 31 試合制覇しました。スペインは次のワールドカップまで4連覇すると思っていたので予想が当たりうれしいです。

田中 まだ見られていない録画した試合が残っています。現地のお話を聞きたいです。

井上 EURO はグループリーグから1試合も遊び試合のない貴重な大会になっています。再び興奮を味わいたいと思っています。

プレゼン I : EURO 観戦ツアー企画者の立場から

ー現地を見たこと、感じたこと 徳田 仁 (㈱セリエ)

現地を見たこと、感じたことを素人レベルでお話させていただきます。最初にオフィシャルソングを流したいと思います。また、大会プログラムとチケットを回覧いたしますので雰囲気味わっていただければと思います。

私はサッカー専門の旅行会社をやっているのですが、ホテルが高騰していたこともあり、他社は軒並み企画をあきらめていた感じなので、今回の EURO2012 観戦ツアーをやったのはうちだけなのではなかったかと思います。今大会はポーランドに比べてウクライナに好カードが多く振り分けられたので、当然多くの方がウクライナに行くだろうと思って大会前にウクライナを重点的に下見したのですが、予想に反してポーランドのコースに申込みの方が多かったです。前回大会のスイス&オースト



リアは国が今回ほど大きくなかったので1都市（たとえばチューリッヒ）に滞在しながら各都市に日帰りで試合を見に行くことができたのですが、ポーランド&ウクライナは広すぎてそれができないため、都市をドサ回りの形でツアーを作りました。その結果、より大きなウクライナが敬遠されて、ポーランド側でスペインやイタリアを中心に試合を見る方が多かったようです。数的にはトータルで68名、前回の約半数くらいの方が参加されました。

今回はスタジアムの規模は大きく、前回大会のように人口5万人の街に3万人収容のスタジアムを作ってしまうようなことはありませんでした。ポーランドの4都市を足した人口が3,357,000人、ウクライナが6,115,000人でしたので、前回の EURO とは街の規模が全く異なりました。

観戦する試合の関係で、ワルシャワ～グダンスク間を移動するお客さんが一番多かったのですが、この2都市間は350キロ程離れていて、車だと4時間半。列車だとスピードがものすごく遅いのと乗換えで約6時間もかかります。ドイツなどと比べると交通インフラはかなり遅れている印象です。それでも移動手段としては、ポーランド側は陸路、ウクライナ側は原則飛行機でした。しかし飛行機も時間通りに飛ばなかったり・・・勝手に時間変更された・・・して結構痛い目にも遭いました。

私は6月17日のクロアチア vs スペイン観戦のツアーにアattendするため、ポーランド航空（フランクフルト経由）でグダンスクという街に入りました。クロアチア戦の前日でしたので、空港にはクロアチアサポーターが大勢いました。

歴代の EURO のボールを並べたモニュメントがありました。→



← こちらはファンゾーン・・・ポーランドの最終戦（チェコ戦）・・・の様子です。最初は人が少なかったのですが、どんどん増えてきます。とうとう試合開始1時間半前には3万人の収容人数を超えそうなほど人が多くなってきたので、私は帰れなくなるのを恐れて途中で帰りました。



← これはノンアルコールビールなのですが、ここでは現金では買えず、スイカのようなカードで買います。非常に面倒くさいシステムでした。

グダンスクで宿泊したホテルはバルト海に面した海水浴場（ビーチ）の近くでした。ホテルは森の中にあったのですが、10分ほど歩くといきなり視界が開けて海が見えるというような環境でした。まだこの頃は気温が低く誰も泳いではいませんでしたが、とても綺麗な海でした。

試合前の様子です。今回スタジアムで行われていたアトラクションのひとつ、各国の国旗をモチーフにした衣装を着て、竹馬のような長い足をつけた美人のパフォーマーです。→
みんな写真を撮っていました。



グダンスクは警備が緩くて発炎筒も焚かれていました。個人的には発炎筒嫌いではないのですが、周りの人はかわいそうですね。煙がすごくて審判が試合を止める場面もありました。

今大会のスタジアムの外観は無機質なイメージのものが多かったように感じます。

これはビニールでできたドイツの旗ですが、見た感じペラペラで薄く、使い捨て？のような感じでした。→

私の後ろはドイツ・サポーターの集団でしたが。大声で歌って唾を飛ばして・・・うるさい人たちでした。



これはワルシャワの街の中心にあるファンゾーンと「文化科学宮殿」です。ソビエトがポーランドのために作ったことになっている有名な建物です。



ファンゾーン内のドリンクを買う方法はグダンスクではカードでしたが、ワルシャワでは1度専用のコインに変えてからビールを買うというシステムでした。なんとめんどろなことでしょう。



スタジアムにこのような張り紙がしてありまし



た。→

特にウクライナ側のチケットが相当余っていたらしいです。なぜかという、観にいきたくてもホテルがなく、国が広すぎて隣国からの日帰りもできないので、皆があきらめてしまったからということだったようです。

これはワルシャワのスタジアムです。開閉式のドームなのですが、この日は閉まっていた。→

今回特徴的だったのは、試合前のセレモニーが始まる前とキックオフの前にカウントダウンがあったことです。



日本では考えられないことも起きました。ワルシャワの準々決勝の当日、試合後に急にトラムが止められしまったため、市内まで延々と30分以上、歩かなければなりません。あとで知りましたが、グループリーグの間は運行していたもののトラブルがあったためということでしたが、スタジアムへ向う途中、「試合後にトラムを止めます」などというアナウンスも掲示も全くありませんでした。



これはグダンスクからワルシャワに向う列車です。→

バリアフリーはなく、列車に乗るときはプラットフォームから1mくらいあるステップを登らなければならず、お年寄りは大変そうでした。



← ここは普段は市庁舎前広場のファンゾーンです。なぜかワルシャワの人たちは道路に座って観戦していました。このファンゾーンは10万人収容でした。



ワルシャワのナショナルスタジアム・・・準決勝ドイツ対イタリア・・・ですね。→

場内アナウンスでバロテリのことをスーパーマリオと呼んでいた（マリオは白人なのに）のですが、日本の友人に聞いたところ。日本ではそう呼ばれていなかったようですね。

私が取材した話をひとつ。ポーランド人は自国が負けてしまった後も会場に来て「ポーリスカ、ビャウイ チェルウォニィ♪」という歌を歌って盛り上がっていたのですが、この歌の意味が分かりますか？ 私にはチェルウォニィの音がチャンピオンのように聞こえたので、きっと「ポーランドはチャンピオン」と歌っているのだと思っていました。ところが、あるとき、空港に向うバスの中で会った英語を話せるポーランド人に聞いたところ、この歌詞は「ポーランドは、白（＝ビャウイ）と赤（＝チェルウォニィ）」という意味だったのです。そして、私が「日本も白と赤」だけど、こんな感じかな？と歌ったところ、バスの中にいた20名ほどが「ヤポンスキ、ビャウイ チェルウォニィ♪」と歌い始めました。すごく陽気な人たちでした。ツアー中、とてもうれしく感じたシーンです。



← これはウクライナのキエフ空港ですが、どう見ても看板が新しい。最近、英語表記を加えたようで、ロシア語、ウクライナ語、英語で書かれていました。

入国はスムーズだったのですが、街に向う前に両替しようとしたところ、窓口が2ヶ所しか開いておらず長蛇の列。タクシー代を両替するのに20～30分待たされました。

決勝の会場「オリンピスキ・スタジアム」はすぐ横に地下鉄の駅があるのですが、試合の3時間くらい前から閉鎖になりました。警官が入口を固めているので1つ手前の駅か次の駅で降りて歩かなければなりませんでした。



← これは決勝の日のスタジアム周辺の様子ですが、イタリア人グループはあまり見かけず、スペイン人グループばかりでした。おそらくイタリア人サポーターは、イタリアが決勝まで来るとは思っていなかったのだと思います。

決勝のスタジアムは「オリンピック」という名前が付けられていることから分かるように、陸上競技もできるようなトラックのあるスタジアムで、ゴール裏はピッチまでかなり距離がありました。

今回私がアテンドしたのはグダンスク、ワルシャワ、キエフの3ヶ所でしたが、その他の開催地の様子はどうだったのでしょうか？

これは、先ほど触れましたが、ウクライナに下見に行った際のドネツク空港到着時の様子です。→



飛行機からタラップで降りて歩いて空港内に入りましたがターンテーブルはなく、荷物はあとからトラックで運ばれてきて驚きました。ハリコフは新しい空港ビルに立て替えられていましたが、リヴィウの空港はドネツクより古く、チェックインカウンターは売店の横に、昔ながらの針の秤りが置かれているようなレベルのものでした。新しいターミナルがすぐ隣りに建設中だったにも関わらず、EUROには間に合わなかったようです。

ドネツクやハリコフの街中を走っているトラムは、去年11月に行った北朝鮮と似ていました。旧共産圏の乗り物はなんとなく色や形が似通っている気がします。

これはトラムの中です。→

この若い女性が車掌さん？で車内で切符を売っているのですが、混んでいても誰が途中で乗ってきた人かちゃんと記憶していて、逃さずに切符を売りに行くのです。すごい！

(ちなみに切符は1.5グリブナ=約15円)



← これはドネツ

ク～ハリコフ間に乗った電車です。300kmほどの距離ですが約6時間かかりました。終点が遠くモスクワだったせいか、車両は普通の椅子席ではなく寝台でした。同じ部屋の人がロシア人の女性だったので、私はすこし戸惑ったのですが、私がハリコフで降りることを伝えると（なぜか伝わった）向こうも安心したようです。

準々決勝のドイツ vs ギリシャの試合前に、ブラインドサッカーが行われていました。→

5対5で、少し見える人と全く見えない人がいるので、全員アイマスクをしてプレーしていました。前の人の肩に手をかけて列を作り入退場していました。



決勝の日にはキエフの中心部のホテルが8～10万円にまで値上がりしていたので、お客さんをホテルに泊め、私は友人の紹介でキエフ大学の近くのアパートを借りました。そのアパートはソビエト時代に建てられた古いもので、中は改装されていて綺麗（WIFIも使えた）でしたが、入口の作りがソビエトっぽく、4機あるエレベータのうち動くのは1機だけで、しかも乗っていると途中で止まってしまうようなほど不安定な動きでした。

アパートといえば、今回一番ホテルが不足していたドネツクでは、ホテルを見つけても1泊10万円以上で、立地が非常に悪い場所だったり移動がとても不便だったりしたため、お客さんもアパートに泊まってもらうことにしました。しかしそれはソビエト時代のもではなく、とても新しく綺麗なアパートで、しかも1泊1部屋180ユーロ。スタジアムからも徒歩10分程度だったので、泊まったお客さんも大喜びでした。

写真の順番に思いのままお話しさせていただきました。

今回の EURO で、私はポーランドとウクライナに3週間滞在しました。前半寒くて後半暑いという気温の変化についていくのも大変でしたが、なにより西ヨーロッパとは文化的にもかなり違う、国土の広い2ヶ国の共催で、しかも共催する2ヶ国の言語も通貨も違うという環境でしたが、何とか無事ツアーを終わらせることができてほっとしています。

次回は参加国が24ヶ国に増え、フランス開催です。今回より規模は大きく、期間も長くなりますが、きっとツアーは企画しやすくなると信じています。ご静聴ありがとうございました。

プレゼンⅡ：ジャーナリストの立場から①—今大会を振り返って

田村修一（フットボールアナリスト）

ポーランドとウクライナは全く事情が異なりまして、私は大会終了後も1週間現地にいたので全部で4週間程いました。ウクライナをベースにフランス代表を中心にすることにしている、移動の関係上今回ポーランドとの往復は難しかったのでグループリーグ中は1度もウクライナから動きませんでした。試合は1日おきに1試合しか見られないという状況でした。ノックアウトラウンドに入ってから、準々決勝、準決勝で1度ずつワルシャワに行き、そのときはポーランドと往復しました。それから、ハルキフにも1回行きましたが、このような状況でしたので、生で見たのは10試合くらい。これは今までの EURO では考えられないことです。こうなることは始めから分かっていたので、ある程度割り切ってはいたのですが、予想以上にきつい面がありました。そういう意味で、私は全体を見られたわけではないので、私がお話する内容は私が動いた範囲内のことであるということをお頭に置いて聞いていただければと思います。

EURO については2000年から取材を始めまして、2000年、2004年、2008年、そして今回が4回目です。それ以外の大会ではワールドカップを別にすれば、アフリカネーションズカップは3回か4回行ってまして、あとはアジアカップやゴールドカップに行っています。そういう大会と比べてどうかという比較の問題もありますが、2つに大きく分けて、組織運営・受け入れ体制の部分とピッチでの試合の2つについてお話ししたいと思います。

<試合を取り巻く環境と競技運営>

組織運営・受け入れ体制については、私がほとんどポーランドに行っていないので、ほぼウクライナに限定されるのですが、まず物価は非常に安かった。これは4年前とは全く逆で、前は超円安の時で苦労していたのですが、スイス・オーストリアはホスピタリティが非常に充実していました。取材のやりやすさについては、私が今まで取材してきた中で1番やりやすかった大会だったのですが、それに比べると今回はとても落差があって、滞在している間中、これは EURO のレベルではないなと思いつつ取材をしていました。この取材のしにくさは前もって誰も分かっていたので、今回はメディアの数も非常に少なかったです。私は準決勝の時にワルシャワのメディアセンターに行って、メディアが溢れているのを見た時には驚きました。キエフにはそれなりにいたのですが、ドネツクやハルキフなどに行くとさらに人数が少なく、Jリーグに毛が生えた程度とまでは言いませんが、ドネツクではカメラマンが40人くらいしか来ていないような、今までの大会とはかなり違っていました。

あともうひとつはウクライナはポーランドに比べると10度以上暑かったですね。時差が1時間あるので、現地の時間で9時45分キックオフになるのですが、そのときでも30度近くありました。フラ

ンス対ウクライナの試合は雨が降って涼しかったのですが、それ以外の試合は暑かったという印象があります。

何が大変だったかというホテルと移動。とにかくホテルの数が足りなかった。ドネツク、ハルキフなど地方は状況がひどくて、僕は事前の予約をほとんどしていかなかったのですが、夏だし最悪凍え死ぬことはない、いざとなればファンキャンプもあると考えていました。1つだけ安いホテルを去年12月にネットで見つけていたのでそこだけ予約して、移動に関しても、ホテルに関してもほとんど取っていきませんでした。結局どうしたかという、ホテルというよりもアパートメントがいっぱいあったので、ホテルと同じようにネットで取っていました。キエフは3回部屋を変えたのですが全てアパートメントでした。どれもきれいでスタジアムからも徒歩圏内、値段もそんなに高くありませんでした。無線回線もアパートの中で飛んでいて悪くありませんでした。しかし、ドネツクは最悪で、最初に行ったイングランド戦のときも220ユーロ。普通に旅行者専用アパートを借りたつもりで行ったら、普段は家族が住んでいるところをその家族が大会中出かけていて、その部屋を空けたような感じでした。中までボロボロで、wifiも当然飛んでなく仕事などできない状況。次に120ユーロで去年取っていたところに行ってみたら、そこは居間にベッドを10数台置いた男女混合のドミトリーで、場所も違うところに連れて行かれたので、聞いてみたら、ホテルは引っ越したと言われました。そして、4人部屋なら他の場所にあると言われました。3回目は280ユーロくらい出して、やっとまともなアパートが取れました。ドネツクは本当にひどかったですね。ハルキフには一旦ドネツクから戻って行くつもりだったのですが、結局そこはショートカットしてドネツクから直接行きました。そのときはホテルを取っていなかったのですが、試合の日ではないので行ったらなんとかなると思って行って、駅の案内所で聞いたら駅に隣接するホテルを教えてくださいました。そこは1500円くらいでシャワー、トイレ共同ですが現地の普通のホテルに普通の値段で泊まったなという感覚でした。

ここでメディアガイドを回します。今までのユーロだとメディアガイドには選手のことなどいっぱい載っていて厚かったのですが、今回は小さな冊子で、必要な情報は自分でネットのメディアページから取れというようなものでした。チケットについても前回まではメディアにも一般客と同じようなチケットが配られていたのですが、今回はネットで取材申請してからメディアセンターに行き、その場で印刷するという今までとは異なるシステムでした。

それから移動に関しては、基本的に列車を取るようにして、それが取れないときに飛行機にしました。列車についてはキエフ・ドネツク間に新しいものができました。それが朝晩1日2本出まして、時間は6時間強、たいてい遅れるので7時間程かかります。ですので、夜の試合を見るためには朝の電車に乗らなければいけない。メディアセンターで予約する限り、メディアは無料で乗れたので、それは良かったです。列車自体は快適で中で仕事もできる状況でした。市内の移動も長距離の移動もメディアは無料でした。車両の入り口で車掌が必ずチケットを確認するので、余計な人が余計なところに座らない。つまり、電車の中に入れば自分の席は必ず確保されているわけで、そういうところでのトラブルは一切ありません。これは旧社会主義国の良さかもしれません。

インターネット環境に関して、ウクライナは日本よりも良くて一般のカフェやレストランでも無料wifiが飛んでいました。スタジアムのメディアセンターには、数は少ないですが、国際電話も無料の固定電話があったのですが、そういう情報はあまり知らされておらず、私は国際電話でオシムに話を聞かなければいけなかったのが助かりましたが、その存在を知らない人もたくさんいました。

全体のホスピタリティに関しては、後で振り返れば良い面も見えるのですが、現地にいるときはストレスを多く感じました。彼らにホスピタリティの意思がないわけではなく、やり方を知らないし、やるすべを持たないという印象でした。組織運営面に関しては、これまでのEUROの中では1番劣っているのではないかと思います。ただ、他のアフリカネーションズカップなどと比べた時にはアフリカの最高レベルは越えていると思います。

<試合とプレー>

次に、試合とプレーに関して、まず過去の優勝国の全てが今回顔を揃えていました。これにはあまり大きな意味はないのですが、8カ国あるいは16カ国での開催になってから初めてのことだと思います。全体の印象としては、FIFA ランキングやUEFA ランキングなどのこれまでの順列が大きく変わるサプライズがない大会だったかと思います。それはプレーや戦術に関しても言えることで、新しいものがあまりない大会でした。4年前は、スペインが新しいチームとして出てきてそれがセンセーショナルでしたし、ドイツも世代交代が進んだり、トルコががんばったり、いろいろな意味で新しいものがたくさん出てきた大会でしたが、今回はその流れが続いている中で、例えばオランダが以外と弱かったり、イタリアががんばったりという小さな変化が見られるという印象でした。個々のチームに関しては、ドイツとスペインはチームとして完成されていたように思います。イタリアは新しい監督が来て、新しいやり方を模索している中で最後にやられてしまったわけですが、僕はUEFAのミスだと思うのですが、試合の間の日数がスペインより1日少なく、しかも移動を伴うため実質1日しか休めない中で決勝に臨まなければいけなかったわけで、これは非常に大きなことだったと思います。

新しいものが非常に少なかった中で、ひとつ言えるのはプレーそのもののクオリティが全体として上がっている。そして、プレーを見せるということがチームだけでなく、UEFA など全体として追求されていると強く感じました。それはチャンピオンズリーグなども同じ流れがあるのですが、サッカーがエンターテインメントとして発展していくために、良いプレーを見せるということが非常に強く意識されていたと思います。より美しく、激しく、スピーディーにプレーできる環境を整えている。レフリーの向上に関してもそうですし、ピッチに関してなど全てがその方向で動いている。コンタクトの激しさ強さがあっても、汚さやずさは排除する方向できている。選手もプレーだけに専念できる環境を求めることで、クオリティの高いプレーがピッチの上で実現している。ただ、ゴール審判に関しては、見ている目の前で誤審が起こったわけで、すごいことではあるのですが、起こりうることではありますよね。しかもあの審判、ガイダンスを受けてのことだと思うのですが、じっと立って見ていないでちょこまか動いているんですよね。それが理由かは分かりませんが、あのような誤審が起こってしまったわけで、プラティニの反対するビデオの導入に進んでいこうとしているわけです。ただしオフサイドの判定1つ取っても、今はものすごく正確じゃないですか。今まで人間の目ではできないと思われていたことが、今は1人の人間の目でも判断できるようになってきていて、それはサッカーにとって良いことなのではないかと思います。

ディスカッション I : 今大会について

中塚 徳田さんは、ホスピタリティという点で何か感じられたことはありますか？

徳田 ホスピタリティに当てはまるか分かりませんが、キエフなんかでは電車を乗り換えるときにA線とB線で必ず駅名が違うので、それで迷う人が多いということを想定して、駅では積極的に駅員が案内していました。基本的にやさしい人たちだと感じました。

牛木 田村さんがおっしゃったホスピタリティの低さは昔の共産圏の影響ですか？

田村 それもあると思います。対応がカテゴリーになってしまうというのと、サービスの本質を根本的に分かっていないというのがあるかと思います。ウクライナは美人の産地としても有名で

すが、自分たちが美しいというのも分かっているから、いい加減でも笑っていたら許してくれるだろうという部分もちょっとあって、環境的な部分が影響していると感じました。

牛木 共産圏で取材していると、個人的にはみんな優しいんだけど、組織としては融通が効かない。それに慣れるまで苦勞しますよね。

田村 こちらの常識としてやってくれると思っているものをやってくれないので、そこはストレスになりますよね。今回の発表するために、何が悪かったのだろうと具体的に考えてみたのですが、喉元過ぎてしまったということもあるのですが、多くを具体的に列挙できないですね。すごく感じていたはずなのに、項目で挙げようとするとなんかあるわけではなくて、それは何かと考えた時にホスピタリティの部分はすごく大きいと感じました。

参加者 後藤（健生）さんが、ウクライナはヨーロッパの田舎のようなロシア圏とは異なる物価の安さがあったと話をしていましたがいかがでしたか？

田村 ポーランドと比べてどうかは分かりませんが、基本的に物価は安いですよ。ドネツクーハルキフを列車で行ったのですが、一等に乗っても 1500 円くらいでした。

白髭 無料の電話にしても、電車にしてもあまり知らせていないというのはホスピタリティの低さを感じますね。

田村 仕事をする環境をちゃんと整えてないんですよね。決勝のことですがメディアセンターでも試合が終わって 2 時になるとインターネットが全てシャットダウンされて、2 時半になると照明が落ちて、その頃 100 名くらい記者が残って仕事していたんですが、もう帰れということなんですよね。そういう今までの大会では考えられないことがありました。

プレゼンⅢ. ジャーナリストの立場から②

—10 年前との比較 宇都宮徹彦（写真家・ノンフィクションライター）

中塚 そもそも今回の月例会は、週刊サッカーダイジェストの宇都宮さんのコラムで、連載 100 回目に「一番悲しい写真」といったタイトルでワルシャワのスタジアムの 10 年前の写真があったことが発端です。できるだけ早い段階でこのような企画をやっておきたいと思った次第です。

宇都宮 今から 12 年前にポーランドのワルシャワと、ウクライナのキエフにはじめて行ったときの写真を今日はお見せしたいと思っています。写真と言っても、当時はデジタルではなくモノクロフィルムで撮って自分で現像していた時代ですが、2000 年当時ワルシャワとキエフがどうだったかをお見せしたいと思います。これらの写真は、今から 10 年前に出した『ディナモ・フットボール』という本で紹介していますが、そもそもディナモ・キエフやディナモ・モスクワといったディナモといった名前が多いのがなぜか、鉄のカーテンが壊れて、ベルリンの壁が無くなって 10 年ほど経った旧共産圏のサッカーの現場はどうなっているのかというのを写真を撮り、文章にした本です。あれから状況はだいぶ変わって、当時はまさかポーランドとウクライナで EURO を開催できるとは予想もつかなかった時代です。

この表紙の写真がオリンピスキスタジアムですね。調べると1923年にできて、その後拡張を繰り返しています。モスクワのオリンピックの時もモスクワだけでなくあちこちで競技をやっているその名残としてこの名前が残されたようです。

これはディナモ・キエフの門です。白い大理石のようなきれいな門があり、入っていくと名称ロバノフスキーの銅像があり、ディナモ・キエフのクラブハウスやミュージアムもあります。キエフの町中の一等地のような場所にこの施設がありまして、この施設を見ると、キエフやウクライナ全体にとってディナモ・キエフというチームがいかに特別なチームかが分かります。私が訪れた時はディナモ・キエフの試合はなくて、2002年ワールドカップ予選のウクライナ代表対ポーランド代表の試合がありました。これは試合当日の写真です。見ていただくと分かると思いますが、代表戦なのにディナモ・キエフのマフラーをしている。なぜかと思って聞いてみても言葉が通じない。後から人に聞いたり、資料を見て分かったこととしては、その当時ディナモ・キエフとウクライナ代表はほぼイコールのような形で認識されていたようです。元々旧ソ連時代にも、ディナモ・キエフはウクライナという共和国の1つを代表するクラブであった。同じようにクルジア人の代表としてのディナモ・トビリシというクラブがあったり、ディナモという名前が付いていながらも民族色の強いクラブがあり、独立して間もない頃は、まだクラブと代表チームが分離していない状態だったのではないかと思います。その後、ウクライナリーグではシャフタール・ドネツクが非常に強くなりましたし、キエフの中にもアルセナルというチームがあったり、クラブと代表の意識は分化していったと思うのですが、私が訪れた当時はまだ一色単になっているという印象でした。

これは試合当日の様子ですが、隠し撮りです。向こうでは警察官や軍人にカメラを向けると、まず飛んできてフィルムを抜かれるか、データを消されるかします。しかもこの時雨が降ってきて、最低最悪の雰囲気の中で撮っていました。

この時、ベルリンからワルシャワ、キエフ、モスクワと、全部列車で移動しました。だんだん東に行くに従って車が汚くなるというのと、警察が多くなるので、だんだん旧ソ連の中心に入っていくんだなと肌で感じました。特にウクライナの警備している人間が意地が悪くて、しかも言葉が通じない。確かこの時ディナモ・キエフが代表戦も仕切っていて、知り合いのツテでディナモ・キエフのプレスオフィサーにチケットをもらったのですが、プレスカードを見せてもどこに行けばいいか全く教えてくれないし、ものすごくアジア人を敵視するんですよ。モスクワでは外国人に対して多少の寛容さを感じたのですが、ウクライナは外国人慣れしていないというのを、この時すごく感じました。しかし、外から入ってくる人に対して疑心暗鬼になるのはある意味仕方ないと思っていて、例えばこれ、ポーランドとの試合ですが、かつてはポーランド・リトアニア大公国というのがあって、そこに占領されていた時代がありました。そしてその後、モスクワ公国の支配下になったり、モンゴルから攻めてきたり、外から来る者に非常に辛い歴史が作られてきたのが影響しているのかなと感じました。

次に、昨日ユーチューブを漁っていたら、ポーランドの、おそらくいまの国立スタジアムの映像が出てきたのでご覧いただきたいと思います。ポーランドの黄金時代ですね。このスタジアムが、2000年だとこのようになってしまっていました。これが先ほど中塚さんがおっしゃっていた、サッカーダイジェストの連載で使った写真です。

ポーランドに行ったときにまずワルシャワに着いて、文化科学宮殿という、タクシーの運転手に言わせると「スターリンの贈りもの」だという高い塔を登ると、ポーランドはかなり平坦な土地なので遠くまで見渡せるんですね。そこでスタジアムがある場所に気がついてバスを乗り継いで行ったら、こんな有様でした。

80年代はじめまではちゃんと試合が行われていたらしいですが、どういう理由か完全に捨て置かれてしまっていました。ベンチは腐って、ピッチもほとんど剥げていて、土が剥き出しの状態でした。上にテントが見えますが、私が行ったときに、ちょうど中国製の家電製品や日用品を売り買いしている情景でした。この頃はまだポーランドは貧しさから抜けきれていない状態で、サッカーよりも日常の生活を確保することが第一優先という印象を受けました。まだポーランドがEUに入る前で、EUROに入ってから、ワルシャワの駅前の雰囲気もだいぶ変わったようですが、当時は本当に夜になると真っ暗で、身の危険を感じるくらい怪しい雰囲気でした。それがたった12年前なので、こうも変わるものかと思いました。

このワルシャワのスタジアムに関しては、たしか2008年にEUROの開催が決まったときに、ここを取り壊して新しいものを作ろうと決まっていたらしいです。ですから一応改築したスタジアムとなっていますが、ほとんど壊して新しく建てたと言った方が適切ですね。

テレビで見たらこの周りもだいぶ変わっていましたね。

東ヨーロッパの国には1997年からだいぶ通っていましたが、この10年の変わりようはすごいもので、最近東欧ももういいかなと思うようになってきたのも、風景や人々のライフスタイルが西側とあまり変わらなくなってきてしまったというのがあります。どんどんヨーロッパが均一化されていっているなど感じます。旧ソ連の国々もそうですし、サラエボなんかも90年代と今とは全然違うんですね。スタジアムの周りもものすごく殺風景でしたね。

白髭 私、2006年ドイツワールドカップの準決勝と3位決定戦の間にワルシャワへ行ったんですが、そのときはまだピッチは綺麗で、掃除しているおじさんに聞いたらまだ試合に使っていると言っていました。この周りも立派な公園みたいな感じで、いろいろなものを売っていましたね。

宇都宮 このスタジアムが新しくなったのはいいのですが、この後どういう使われ方するかが気になっています。昔は7万人くらい入るスタジアムだったのが、今は5万人くらい入るスタジアムになったんですね。聞くところによると、レギア・ワルシャワとポロニア・ワルシャワのホームゲームで使うらしいですが。

僕はこの時他のスタジアムでポロニア・ワルシャワのゲームを見に行っていて、このような感じでした。ワルシャワにはレギアとポロニアの2つのクラブがありまして、レギアは陸軍のクラブ、ポロニアは民衆のクラブで鉄道関係者が多かったと聞いています。この写真はトップリーグで、このスタジアムは7千人くらい収容できるんですが、地域リーグの試合をやっているような雰囲気でした。

なんでポロニアの試合を見に行ったかと言いますと、この当時、ナイジェリアからポーランドに帰化したオリサデベという選手がいて、当時の僕にはものすごく衝撃的で、だったら見に行くしかないと思って行ったのがその試合でした。この頃からアフリカの選手が東欧の方に来ていたんですね。昔だったらイギリスやフランスの旧植民地に行って帰化するというケースもあったんでしょうけど、歴史上アフリカに植民地を持たなかったポーランドにまでアフリカの選手がプレーの場を求めて、さらに帰化してしまうということが、わりと頻繁に起こるようになったのは2000年からです。結局オリサデベは2002年のワールドカップに出場したのですが、定着せず中国の河南に行き、その後イングランドの2部か3部くらいで今プレーしていると思います。

ポロニアはこの頃UEFAカップの3回戦くらいまで行った記録はあるのですが、はっきり言って5万人スタジアムを埋めるようなチームではありません。チャンピオンズリーグに出たらお客さんは増えるかもしれませんが、この程度のチームがあんなスタジアムを埋めるとはとうてい思えない。ポルトガルなどでも結構問題になったようですが、スタジアムの今後の有効活用方法をどうするんだろうなと思いました。

ワルシャワという町はナチスドイツに蹂躪され、その後ロシアに蹂躪されて壊滅的な被害を受けたんですね。それを全部建て直して、今はとても綺麗な公園になっていたのですが、そこでくつろぐ若者の写真です。今回のユーロは美人が多いということで最後にこの写真を出したのですが、確かにスラブ系の女性は綺麗なんですけど、私から見るとバルカンの女性とウクライナの女性はどうしてもメンタルが違うの难道うかだと思います。バルカンの女性はとても情に厚いですね。特にセルビアとかボスニアとか。クロアチアはもう少しヨーロッパナイズされています。スロベニアに行くともうかなりヨーロッパ人という感じです。それに対してウクライナ人女性の氷のような冷たさというか、愛想を全く感じられなかったというのが正直な感想です。ポーランドはもう少しいい意味で田舎っぽいというか、純朴な雰囲気なのですが、今回の EURO は美人が多いと喜んでいたり方もいますが、バルカンの方がもっといいよというのが私の意見です。

ディスカッションⅡ：これからの EURO について

宇都宮 最後に1つ問題提起をさせていただいて2次会のテーマになればと思います。EURO が終わった直後にニュースで見たのですが、次の2016年の EURO はフランスで行われるのですが、その次の2020年の EURO がどこで行われるかは非常に気になるところです。プラティニ会長は、2020年はヨーロッパ全域でやるというのも1つのアイデアだと言っているわけです。つまり、ロンドンとかパリとかフランクフルトなどで開催するというイメージなんですかね。チャンピオンズリーグを集中的に行うようなイメージを彼がしているのかは分かりませんが、これは非常に気になることです。

ご存知のように、今大会までは出場は16カ国です。次から24カ国になるんです。現在のUEFAの加盟国が53カ国なので、その半分近くが EURO に出場できるようになるので、次はキプロスとかエストニアとか、ボスニアは間違いなくかの世界になるわけですよ。それはそれで楽しみなのですが、24カ国を受け入れられる国がどのくらいあるかが非常に疑問です。フランスは32カ国でワールドカップやっていますから問題ないと思います。他は共催とは言え、24カ国を受け入れられるかというところかなり厳しいと思うんですよ。そうすると大会フォーマットそのものまで変える必要性に迫られるのではないかと思います。

僕は今回の EURO でさえ相当無理だったと思っているんです。EURO の限界が見えたのが今回の大会だったのかなと思います。

田村 16カ国だったら開催する余裕いくらでもあると思うんですよ。(今大会については)プラティニはこれがきっかけで社会が開け、施設が整い、国が良くなっていけばいいと言っていて、それはその通りだと思います。ある意味、社会主義の旧弊が一番残っている国が変わっていくという部分は僕も納得できます。だから16カ国までだったら共催でなんとかなると思います。しかし、16カ国でも単独開催できる国は、ヨーロッパのサッカー大国しかないと思います。それが24カ国になると何が何だか分からなくなりますよね。結局プラティニが言っていることはチャンピオンズリーグと同じにするということなのか。最終的に(準決勝と決勝が)4カ国の集中開催とかになってしまったら一番最初のフォーマットとほとんど変わらなくなってしまうわけですよ。そうすると在り方が全然違いますよね。

鈴木 中位国をもう少しレベルアップさせたいというのがプラティニの1つの狙いですよね。

田村 結局、今回出場した 16 カ国は全部決勝トーナメントに出場できるということですよ。

参加者 92 年までは 8 カ国でやってましたからね。そうすると 2 週間もかからないので、取材に行くのも非常に楽しかったですね。濃い試合ばかりです。

阿部 南アフリカのワールドカップも今回も、開催国が早々に敗退しているわけじゃないですか。それは現地の盛り上がりにもどのような影響を与えますかね？

田村 上に行っていれば全然違ったと思いますが。ただ、彼らも負けてしょうがないと思っているから、盛り上がりは盛り上がりのままでありましたよ。

参加者 でも、全然関係ない試合でポーランドのサポーターが自分たちの応援歌歌っているのも何か悲しいものがありますね。

鈴木 82 年大会からワールドカップの参加国を増やしていったときも、全体のレベルアップにつながるということでやったわけですよ。プラティニが EURO の参加国を増やそうというのも、今回出られなかったブルガリアやルーマニアが出られるようになって、全体の底上げにつながっていく実感があるのかどうかということなのです。モチベーション的にやっぱり良いことなんでしょうかね？

田村 プラティニは少数を切り捨てないことを公約にして会長になっている人なので、その流れで話していて、例えばボスニアが EURO に出るか出ないかで、その国の国民感情だけでなく、いろいろなものが変わってくるので、そういう国にとっては門戸が広がることはいいことだと思いますね。しかし、もっと大きな枠の中でどうかということは、別の問題だと思います。

井上 日本人から見ると他人事ではありますが、チーム数が増えると大会中のレベル差がワールドカップのようになってきて EURO の良さが消えてしまいますね。EURO の盛り上がりは消化試合ややる前から結果が分かっているような試合がないことでもあるので、そういう良さがなくなってしまうとも思いますね。

牛木 テレビ放映との関係はどうなんですか？ 決定権握っているのはテレビじゃないかと思うんですよ。

参加者 ワールドカップと一緒に、EURO の収入源も圧倒的にテレビなんですよ。

田村 私は 2000 年に取材した時にチャンピオンズリーグと EURO の間に大きな落差を感じました。当時既にチャンピオンズリーグはお金がたくさん入ってきているので、非常にお金をかけて運営しているという印象が強くて、それはメディアへの対応を 1 つとってもそうです。それに対して、EURO は手作りでやっている感じがあって、インフラの整い方も違うなど思っていました。その落差を解消して行って、いまは同じような感じになってきているわけで、UEFA が EURO をチャンピオンズリーグと並ぶようなコンテンツにしたなどは思っているんですが、その路線の延長としての出場国 24 カ国ということだと思うんですよ。個人的にはそこまで大きくする必要はないと思っているんですが。

鈴木 私たちが子どもの頃はネーションズカップって呼んでましたよね。

中塚 先ほど宇都宮さんのお話の中にあつた「黒いポーランド人」が出てきたあたりから、ネーションズカップという名称が意味を成すのかという疑問が出てきたんだと思います。けど、ネーションズカップのステータスを何とか引き上げて、クラブカップとネーションズカップを並行してこれからもやっていこうという意図があると思います。

宇都宮 ただ今回のように、スタジアムを無理やり作るとか言うのは、ヨーロッパの経済状態を考えると現実的でないと思うんですよ。

田村 できる国とできない国がありますよね。フランスなんかでは、ワールドカップの時に作ったりリノベーションしたスタジアムが、いまのワールドカップ基準には満たなくなってきたしまっている。ブンデスリーガでもプレミアリーグでも、うまくリーグをイノベーションできたのは、スタジアムをきれいにしてお客を呼べる環境を作ったというのがものすごく大きいじゃないですか。ドイツのスタジアムがどこも典型的にそうですよね。メンヘングラードバッハなんかは、ビリだった時も毎回5万人入っていたんですよ。フランスなんかは経済的余裕がある程度あるので、大会を契機に新しい客を呼べる環境を作りたいという希望がありますよね。ですので、そういうことができる国であれば、大会は良いきっかけになるのですが、そうではない国にとっては負担になるという両面がありますよね。

中塚 よその大陸の話を、あたかも自分たちの話のようにできるサロンはさすがですね（笑）。続きはルンで行いましょう。

徳田さん、田村さん、宇都宮さん、ありがとうございました。

そして「ルン」へ…